

発行 長野県美術教育研究会 下伊那支部 印刷 株式会社 秀文社 飯田市通り町 1 丁目 2 TEL 0265-22-0176	長野県美術教育研究会会報 第 113 号	発行人 長野県美術教育研究会 下伊那支部 支部長 渡邊 浩(松川中) 編集人 服部淳之介(松川中央小)
---	--	--

巻頭言 第 74 回 長野県美術教育研究大会

下伊那大会を終えて

下伊那大会大会運営委員長 渡邊 浩(松川中学校)



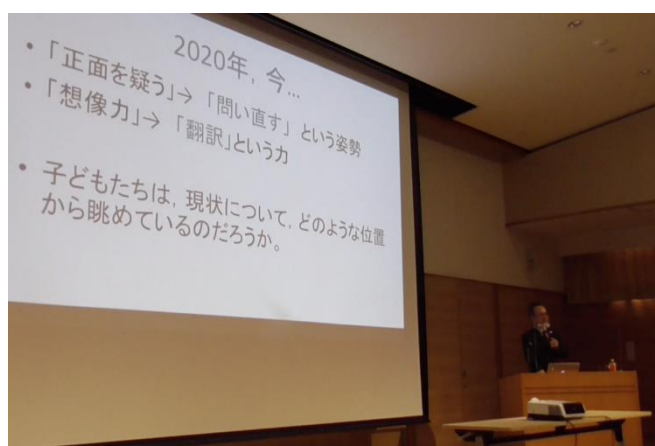
令和 2 年,新型コロナウイルスが全世界で猛威を振るい,一連の規制が社会全般で敷かれる中,参加者を制限させていただく等の緊急措置を講じながらも長野県教育委員会,松川町教育委員会,下伊那校長会,下伊那教育会,信濃教育会,日本教育公務員弘済会長野支部,並びに各方面からの多くのご理解とご支援をいただき,本大会を無事終了することができました。授業を提供していただいた松川北小学校,松川中央小学校,松川中学校の皆様には,例年ならば,県美研の研究推進委員の先生方も集まって合同の研究会を持つなど,支援体制を固めながら取り組んできたわけですが,本年度はそのような体制が組めない状況の中,指導案の作成や当日の校内態勢に至るまで,本当に数多くのご尽力をいただきました。ここに深く感謝申し上げます。また,当日の講演会では群馬大学共同教育学部教授の林耕史先生に「今,図画工作科・美術科の教育で大切にしたいこと」と題し,ご講演をいただきました。感染状況によっては中止もやむを得ない中,「如何様にも対応しますよ。」と,おしゃっていただいたことで,安心して講演会まで実現することができました。重ねて感謝申し上げます。

「思いつながら 広がる 私の造形ネットワーク ～自分らしさを楽しむ授業へ～」を大会テーマとし,「思い」を持つこと,その「思い」に沿って評価することが,自分らしさを楽しむ授業につながると考え,約 2 年半に渡って研究・実践をして参りました。本大会での実際の授業では,どの実践でもそのことを大切に,題材設定,授業展開,学習カードなど全て「思い」をもとに友や材などに関わりながら授業を構築しました。このことを念頭に置いていただきながら,授業記録を読んでいただければと思います。

また,「思い」を持つこと,その「思い」に沿って評価することは,郡あるいは県全体として,本研究会の会員にとどまらず,日常的に図画工作の授業を実践されている小学校の先生方にも共有してもらうことが大切であると考えております。そこで,下伊那支部では県児童生徒美術展,今を生きる子どもの絵展において作者の「思い」をつづった「作者カード」を昨年度からつけていただき,それも参考にしながら審査を行うという方法をとっているところであります。

本研究大会の最後には、群馬大学共同教育学部教授 林耕史先生にご講演いただきました。東日本大震災が起こった 2011 年、塩筑木曾大会以来、2 度目のご講演。2020 年、コロナ禍の中で行われた本大会においては、「翻訳の力」という言葉を中心にご講演いただきました。「わかりあえなさをわかりあうという翻訳の力を持つ」。これは、全体会の開会式で紹介させていただいた大正 10 年の『芸術自由画教育』の木下紫水の言葉「どの子供についても、しみりと二人して話してごらんなさい。皆こうした美しい動機や、尊い過程を持っています。知るということはやはり愛です…。」と相通じることではないかと感じました。さらに林先生の言葉は続きます。「その子がやっていることを、そのまま言葉にするといい」と。「教師が、子どもの思いをありのままに受け止めること。」「できる、わかる、ふれる、いっしょ、で育つは時間であるけれど、できない、わからない、ふれられない、ひとり、でも育つ時間となるというところが図画工作、美術のいいところ。」「培うという言葉がある。育とうとするとところに、土を寄せる。そんな気持ちで子ども達に寄り添う教師でありたい。」そして「作品をつくることが目的ではなく、10 年後にこういう人になって欲しいから今日の授業をやったんだ。図工美術はまさに人を育てる時間なのです。」先生のひと言ひと言に、私たちの進むべき方向がはっきりと示されていました。「木下から 100 年。戦争、東日本大震災、新型コロナ…しかし、大切なものは残る。何が大切かを見つめ続けていかなければならない。」と締めくくられた言葉が深く心に刻まれました。（講演記録は、下伊那大会HPに掲載しましたので、ご覧ください。）

コロナ禍の中、「どのような状況の中でも学校が再開されれば、私たちは授業を進めていく使命を担っている。」という思いを確認し、本大会を開催しました。県のHPにも『図美を止めるな!with コロナでもできること』と題して長野上水内支部の皆さんの研修の様子が掲載され、とても勇気づけられました。まだまだ予断が許さない状況が続きますが、未来を託す子どもたちのために、これからも県内すべての地域の先生方と情報を共有しながら造形ネットワークを張り巡らせ、前に進んでいかなければと思います。最後になりましたが、本大会を支えていただいたすべての皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



第 74 回 下伊那大会 研究の成果と課題

下伊那支部研究局長 加山 雅康(座光寺小学校)

I 「思い」の実現に向けて

本年度は、コロナ禍の中で、可能な範囲での研究となったため、実践の積み重ねが困難でした。そんな中でも、研究校では工夫をして事前授業・公開授業に取り組み、各校で研究を進めていただいたことに感謝します。ソーシャルディスタンスを意識せざるを得ない中、「思い」を広げるための重要な手立てである「友との対話」を積極的に位置づけることが適切であるか迷いもありました。しかしながら、展開の有無にかかわらず、適切な距離感でのかかわり、自然なかかわり合いの中から生まれた言葉や表現が思いをつなげ、広がっていくことが事前研究の様子にも顕著に見られました。個の中での自己内対話に視点を置くことも考えていましたが、やはり学校での豊かな造形活動のためには、他とのかかわりが必要不可欠であると感じました。

「思いつながる 広がる 私の造形ネットワーク」のテーマのもと、本年度下伊那大会では次のような実践を残すことができました。

①一人ひとりが「思い」を持つことのできる題材・導入の工夫

松川北小では、会議室に事前に天井からひもをつるしてあり、教室に一步足を踏み入れた児童が、これから活動する場に引き付けられる工夫がしてありました。松川中央小では、4 月から絵画領域の題材に積極的に取り組んで、「思い」について、言葉や物語、写真など、様々なアプローチで児童に投げかけ、意識させてきました。松川中では、苦手意識や失敗に対する不安を解消し、また新しい表現の魅力を引き出す表現方法を考え、魅力的な題材が生徒の思いを刺激しました。

②思いを表現に結び付ける手立てのあり方

松川中央小では、研究グループの教師が同じテーマで作成した 6 枚の絵を児童が鑑賞し参考にするすることで、思いに適したよりよい表現方法を選べるようにしました。松川中学校では示範作品と、制作の手順を示した動画を作成し、生徒が制作の見通しを持ちやすくする工夫がありました。

③思いの深まりや変化が確認可能な学習カードの工夫

松川中央小では、展開によって 4 つの学習カードを用意。その時間のねらいに沿った、メモやアイデアスケッチ、振り返りができるようにしました。言葉で表したことを再現する活動に近づいて行った事前研究の反省から、言葉もスケッチも簡単なもので良いことを確認しました。松川中では、手順のステップごとに学習カードを用意し、どの段階でも彫り・配色などの表現手法と「思い」を関係させて考える記述欄を設けたことで、「思い」がつながっていく学習カードにすることができました。教師による朱書きのコメントも、ステップごとのため、生徒の「思い」に具体的に寄り添っていました。

④思いを広げる「対話の時間」の設定と環境づくり

松川北小の造形活動では、意図的に対話の時間は作らなくても、魅力的な題材に積極的にかかわっているうちに、自然と「どうやってやるの。」「〇〇くんすげー」などつぶやきが発生。教師も共感して「～したんだね。」と返すことで思いがどんどんつながっていききました。松川中央小と松川中では普段より 4 人 1 組でのグループ活動を積み重ねてきていることで、自分の思いを話したり、友のアドバイスを聞いたりすることに抵抗がなく、思いを深めていく過程に友が自然と位置づいていると感じました。

⑤作者の「思い」をもとに話し合える鑑賞の時間

相互鑑賞、振り返りの鑑賞の時間を設定し、学習カードに書かれた「思い」に沿って話すことで、必要感のある話し合いが生まれました。自分の思いを最後までつないでいくために有効であったと言えます。松川中では、日々の取り組みから、友の思いを大切にしながらアドバイスができる生徒が育っています。

2 研究を通して見えてきたこと

どの学校の実践からも、児童生徒の「思い」に立って考えることは、児童・生徒の実態に寄り添って題材や素材、展開を考えることにつながるといえる点は共通していたと思います。松川北小では、造形遊びにおいて、活動の中でひらめきを確認できる思いにしていたのは、友だちの言葉や教師の声掛けでした。松川中央小の絵画題材では、児童の発想の過程をていねいにひも解き、段階を追って指導していくことで、思いが最後までつながって、児童自身が納得できる表現になっていたと思います。松川中では、様々な経験をもとにした生徒同士のかかわりが、互いに高め合う制作活動になっていました。「思い」がもとになった表現こそ「自分らしさ」であり、「わたしっていいな」へとつながる道筋であると考えます。

この下伊那大会の取り組みと合わせて、県展・「今を生きる子どもの絵」展の下伊那審査会では「思いカード」を小3～中3までに書いてもらい、絵に貼って提出、審査の参考にしています。手間がかかり、教師にもその意図するところをしっかりと伝えていくということがこれからも必要ですが、こうした取り組みを広げ、児童・生徒の「思い」について考え共通理解していくことが、造形ネットワークを広げていくことにもつながっていくのではないかと思います。

本年度研究にご協力をいただいた全ての方々に感謝します。ありがとうございました。

松川北小学校		3 学年	研究の成果と課題	
題材名	ひもひもワールド		授業者	稲吉 匠 教諭
主眼	ひもをつなぎ合わせる練習をし、空間をどう変化させるかイメージを持った子どもが、教室内でひもを結んだり巻いたりする活動を通して、自分たちの活動によって身近な場所の見え方や感じ方が変わること気づき、活動を楽しむことができる。			
授業の概要	天井の中央から四隅に向かってスズランテープが張られた教室を会場として、ひも（毛糸・スズランテープ）を使って、蜘蛛の巣みたいにひもを張りめぐらしたり、巻き付けたり、垂らしたりを、つなぎ方や配色などを工夫して、ひもをつないでいく活動を楽しんだ。 （４５分授業 全３時間中第２時）			

Ⅰ 授業の様子

教室には、5色以上のスズランテープや毛糸玉が机や床の上に置かれている。黒板には、めあて（つなぎ方や色の組み合わせを工夫してひもをつないでみよう）の他に、「ひもを使ってできそうなこと」「ひもの結び方」「安全上の約束」が板書してあった。導入部分では、教師がそれらを端的に確認し、「どんどん繋いでいって好きなように自由につなげていってください」というと、「よっしゃー」という声が上がった。迷いもなく活動に取りかかる姿から、どの児童も自分がやってみたいことがはっきりしており、題材に意欲的に関わっている様子が伺えた。

先生がデジカメで写真を撮りながら、毛糸玉で、ボンボン作りやひもを編んだり、スズランテープを、張り巡らしてあるひもに結んだり絡めたりしている児童に声をかけていく。

A 児がスズランテープを何色も束ねてひもに結びつけていた。「いろんな色を組み合わせたんだ。きれいだね。」と先生が声をかける。「A ちゃんすげえ」「よくいいこと考えるな」という声が子どもたちから上がった。「A くん赤色いる？ つくっとくね。」「ピンクと黄色かな？」A 児の活動が他の児童にも広がり、教室の中心はカラフルなスズランテープの束でいっぱいになった。

「蜘蛛の巣にみえた」という B 児は、教室内をぐるぐる周りながら毛糸をひもに結んでいく。「高くするにはこうする」毛糸の端を引っ張るとスズランテープのひもを伝ってすると毛糸がスライドして登っていくことを発見して満足気につぶやいていた。

C 児は、「ゆらすときれい。だんだんへびに見えてきた。」結んだひもを引っ張ると全体が揺れるのを見て、体全体を使ってひもを引いて楽しんでいた。D 児は「レーザーみたいだ」と言って揺れたひもの間を慎重にくぐり、ひもに触れるとしびれたふりをして倒れ、自分たちで作った造形を楽しんでいた。

毛糸玉の作品が完成した児童は、自分が気に入った場所を見つけてひもに結んだ。



終末は「真ん中が一番すごいな」「さみしいから次はここをかざる」などの声が聞こえ、次時への課題を持った児童の姿があった。



<文責 伊賀良小 権田美和子>

2 成果と課題

【授業研究会から】

○思いを繋げるという行為が作品制作と直結していた。

手元で毛糸をつなげてアクセサリのような形をつくる児童がいたり、最初から中央の紐にくくりつけたりしてダイナミックな動きで作品をつくろうとする児童がいた。表現の仕方は異なるが中央にくくられたヒモに結び付けることが大きな作品として形がつながり変化していく面白さにつながっていた。

○他の児童とかかわらないで素材の毛糸に真剣に向き合う姿があった。毛糸を編んでつくった形を空間に残したいという思いを感じることができる。

制作に没頭している児童が時より顔を上げて中央の紐にくくられている友だちの紐を見つめている。すぐに中央の紐にくくり繋げるわけではないが、自分がつくった形が友だちの形とつながり面白さが広がっていくことを意識している。空間を共有して作品を広げていくという共通の思いがありよかった。

○振り返りの場面で教師の願い（ダイナミックに表現するおもしろさ）を共有できるとよかった。

紐を引っ張ることであまれる新しい動きや形に注目している児童がいたり、紐の中をくぐる楽しさに気づき作品の中に入って喜ぶ児童がいたりした。そのときに作品が空間を面白くしているということを全体に声掛けすると、一度手を留めて作品を様々な角度から眺める児童が増えダイナミックな表現の面白さに気づくことができたのではないかな。

○次の授業で児童が面白いと思う視点を動画にすることで楽しさを共有できそう。

見る場所によって変わるひもひもワールドの魅力を体感している児童がいたので、その面白さを動画にしてお互いに視聴し合うと、面白さを視覚的に共有、体感できるのではないかな。大きなテレビに写して面白いポイントを、動画を停止して見合っても面白そう。

【助言者 千原先生のご指導より】

H くんから

・すずらんテープを何色も束状にしていく。途中で友達から「カラフルできれい」という言葉をもらい嬉しそうにする H くん。その後毛糸でも全色を混ぜて試行錯誤していたのは、友達からスズランテープでの取り組みを認められたから。自分の活動に価値があるという自己肯定感が育まれていくのは造形遊びの中で大事な視点。

・すずらんテープだけでなく、教材研究をして毛糸を用意しておいた先生の準備の良さ。色の鮮やかさや伸び縮みなどに違いがあり、発想が広がった。前時に見通しを持たせていたからすぐに活動でき、素材のよさを感じることができた。

3 下伊那大会テーマ 「思いつながる 広がる わたしの造形ネットワーク」～自分らしさを楽しむ授業～に関わって

造形遊びにおける、場づくり、材料の用意の大切さを教えられた授業だった。魅力のある材料・場所。児童が見通しの持てる事前準備によって、ひらめきがたくさん生まれ、「思い」へと変わっていく様子が見られた。さらに、友達とのかかわりからアイデアが深まったり、友達から認められたりすることで自信をもって表現する児童の姿があった。認められることで、自分の「思い」がつながり、見合うことで「思い」を広げていっているのだと感じた。

<文責 旭ヶ丘中学校 若林翼>

松川中央小学校 6 学年		研究の成果と課題	
題材名	時空の扉をひらいて（絵画）	授業者	北田総一朗
主眼	相互鑑賞によって描きたいことに合わせて色々な表現方法や表し方があることを知り、その面白さに気づいた子どもたちが、学習カードをもとに描きたいことを共有しながら意見交換することを通して、自分の思いを表現するための表現方法や構成を工夫して絵に表すことができる。		
授業の概要	友だちに描きたい場面について説明したり、質問したりして、想像を膨らませたり、描きたいものをはっきりさせ、下描きを始める。（45分授業 全7時間中第2時）		

Ⅰ 授業の様子

①児童各自、机上に自分のアイディアスケッチ

②導入：教師の「どんなこと、困っているの？」の投げかけ、自分の描きたいものを如何に表現しようかと困っていることを児童が発言した後、「描きたい場면을説明したり、質問に答えたりして、表現方法や構成を、はっきりさせよう」というめあてが設定された。

その後、教師が友達との問答の示範をしてみせた。互いに質問しながら「相手の話にガンガン突っ込み、そして気づいたことを描き加えること」そして、「(描きたいものを) はっきりさせる」ことを大切にするという確認をして個人制作に入った。

③席の隣の友達を質問し合う。聞く側の児童は、相手の描きたいと思っていることに「背景は、どうするの?」「絵の具で描くの?」等の質問をしていた。その質問に答えるために、考え、自分の構想の曖昧な部分に考えをめぐらし、さらに踏み込んだ表現を考えている様子が見られた。

④話したことをもとに個人の制作に入る。教師は「やりながら変えてもいい」と声がけしながら、児童の描こうとしている様子を力強く支持し、認めていきながら机間巡視。

⑤学習カードに振り返りを記入し、数名そこまでの様子を作品と共に発表し、終了。

【思いをつなげ、広げた児童・生徒の姿】

A 児：僕は、縄文時代。

B 児：なるほど、ぜんぶ色を塗らずにする…。狩りをしているのは自分？

A 児：自分じゃない。扉を開けているのが自分だから。

「扉を開けているのは自分」という A 児。手前に開けた扉をダンボールで立体的に貼付けて「開けている」ことを

強調しようとしていた。友達との問答で自分の思いをより明確にしていた。制作に入ってから、すぐに描き始めず、手で、画用紙で空にデッサンしていた。彼には、もう白い画用紙の中に自分のイメージがはっきり見えているかのようなだった。そして、「よし」とつぶやき、描き始めた。自分のイメージ、思いと向き合い、表現に打ち込む姿であった。



<文責 豊丘南小学校 築島 由美>

2 成果と課題

【授業研究会から】

○児童が「表現したい！」という思いを持つための工夫

- ・お互いに良さを伝え合うことによって「表したい」という思いが深まっていく姿があった。
- ・自分の言葉で良さを確認できたことで、自己肯定感が高まった。
- ・教師自身が活動を楽しむ姿があり、それが生徒にとっての本当の楽しさにつながった。

○言語活動を表現に活かすための工夫

- ・導入の会話形式の板書によって、言語活動からスムーズに表現に移行できていた。
- ・友のアドバイスを受けて、「(表現が) 変わっていいんだよ」という声掛けが有効だった。
- ・アドバイスし合ったことで、表すためにどんな工夫が必要かクリアになっていく姿があった。

○その他

- ・全体的に思いや良さを伝え合うことを楽しんでいた。
- ・お互いを認め合うクラスの空気が醸成されていて、非常に豊かな活動になった。
- ・思いを作品として表現するという活動に浸りこみ、楽しむ姿があり非常に良かった。

【助言者 志摩宏道先生のご指導より】

① 指導案から

- ・題材同士の繋がりが意識されており、既習の内容を活かしたため、児童たちに「迷い」がなかった。
- ・タブレット PC を活用する、表現と鑑賞を関わらせて活動に入れ込んだりするなど、児童の発想を支える工夫がなされていた。

② 授業の様子から

- ・造形的な見方・考え方を働かせるという観点から、示範作品を黒板に示すとなおよかった。
- ・学習課題に沿った振り返りがなされていた。

③ 今後について

- ・児童の「思い」を大切にしていって欲しい。(新指導要領にもかかわって)
- ・作品の上手さを主にせず、思いを表すためどう工夫したかを評価にしていける。
- ・ICTのさらなる活用を進めて欲しい。
- ・調べるだけでなく、作品の蓄積やアニメーションなどに活かしていく。
- ・ただし実際に手で作ることも大切。「アナログとデジタルのベストミックス」を目指して欲しい。

3 下伊那大会テーマ 「思いつながる 広がる わたしの造形ネットワーク」～自分らしさを楽しむ授業～に関わって

言語化して残したり、伝えたりすることを通して「思い」をアウトプットしたことで、自分に自信を持ったり、表したいという気持ちを持ったりしたことが、制作の見通しや意欲につながっている。伝わるように整理をし、話す中で気づいたり、友達からのアドバイスを聞いて取り入れたりする段階があったことで、一人で考えているときよりも、「思い」がより具体的になったことは、思いの広がりと言える。こうした時間は「思い」や作品の中に、自分では気づけなかった「自分らしさ」に気づいていくことにもつながっていくのかもしれないと感じた。



<文責 飯田市立緑ヶ丘中学校 中澤 竣>

松川中学校 3 学年		研究の成果と課題	
題材名	私のかたち・いろ・広がれ！	授業者	水野 恭子
主眼	なりたい未来の自分のかたちを彫り、凹部に着色した生徒たちが、凸部をローラーで着色する場面で、自分でローラーの使い方を試したり、友だちの表現を見たりすることを通して、自分の「思い」が表現できるように工夫して着色することができる。		
授業の概要	彫っていない面をローラーで着色する。「思い」が伝わるようにローラーでの着色を工夫してあらかず。（50分授業 全12時間中第10時）		
Ⅰ 授業の様子			
① 自分の「思い」をあらわすために、どのような色にしたいか発表。 H生：「明るい色で自分の根性とかがんばりを表して、不安の要素を入れたかったので黒を使いました。うねうねしているのは誘惑や敵です」 先生：「どうして白を使うの？」 H生：「真ん中の黒が強すぎたので」 ② 生徒の参考になるようにローラーの塗り方のバリエーション見本を提示。続いて、初めてローラーを使う生徒に、使い方やいくつかの注意点について細かく示範。 ③ 配色やローラーの使い方を工夫し、それぞれが自分の「思い」をあらわそうと、制作開始。 K生：「ねえ、見て。僕、センスあるわあ」 O生：「そこ、マジできれいじゃん。そこ!!（一部分を示し）」 K生：「はいはい、そこだけ?（一部分を示し）」 R生：「この色にしようと思ったんだけど、どうやって作ったか忘れちゃったよ。どうしよう」 先生：「すごい。グラデーションしてるじゃん」 H生：「(グラデーションに) なってます? (うれしそう)」 H生：「うーん、違うなあ。違う、この色じゃない」 4人グループ（松川中スタンダード）の中で関わり合いながら、それぞれの「思い」をあらわそうと奮闘。 ④ 一度、全員で巡回してお互いの作品を鑑賞した後、「思い」に近づいてきた生徒の作品を全体で鑑賞。 先生：「真ん中の方でどよめきが起きていたので、Aさんに発表してもらいます」 A生：「白い方は、自分の心の弱いところ。上のとげとげは、いろんなイライラ。だんだんと明るい気持ちで進んでいけるように表現しました」と発表。自分の思っていたように計画的に制作できたという達成感が表情に出ている。 ⑤ 学習カードに今日のまとめをし、次時への見通しを持ち、終了。			
    			
<文責 喬木中学校 世古口尚己>			

2 成果と課題

【授業研究会から】

①ローラー表現の例やジェッソを使った示範について

- ・示範で色の微妙な変化や、全体の印象が大きく変わることの面白さを感じ取ることができていた。ただし、ある程度は計画性が必要になる材であった。
- ・教師の作例を基に、色を重ねることによる奥深さはなぜ出るのかを考えるなどして、つくりたいという気持ちをもっと高めたい。
- ・偶然性のある色や着色表現を、自分の表したい気持ちとどう繋げていくかの指導支援を大切にしたい。

②材料について

- ・ローラーの良さは大胆に色をつけられることが挙げられる。初めてでもグラデーション表現等に粘り強く取り組めていた。
- ・マスキングはパーツだけを取り出して別の色で着彩するなど、色々な可能性があると思った。
- ・ローラーで絵の具を混ぜたり、マスキングテープを剥がしたりする時の気持ちよさを感じていた。
- ・とても新鮮な反応をしていた。1時間で絵画になる良さがある。

③グループについて

- ・「松中スタンダード」による日常的な4人グループの学習形体の良さが活かされ、友の表現の工夫を見て、自分の配色やローラーの使い方をさらに工夫する姿が見られた。
- ・4人グループの表現方法が同じだと、表現の幅が広がらないことがある。
- ・表現でも鑑賞でも、思いを明確にして、自分の思いを表すことに繋げさせたい。

【助言者 上條 雪絵先生のご指導より】

①「私っていいな」という自尊感情を高め「自分らしさを楽しむ」授業であった。自分を理解し、自分の中に評価基準をもち、自分の思いを、自分の手で表現できることで、満足感や自尊感情の高まりを感じられる題材だった。「自分の思いを自分で表す」ためには、「主題」がより重要となる。自己理解は、自己内対話と他者との双方向の関わりを通して深まっていく。

②題材と手立てがよく考えられていた。板という材や台紙を使った試し紙など、試行錯誤がしやすく、子どもの実態や成長過程をよく考えられた題材だった。また、導入や終末の場面で、教師が「これはどういう思い？」と問い返すことで、生徒がこれまで意識していない部分を引き出し、思いを表現に結びつけるための手立てとなっていた。示範の場面は、方法や手順の指導ではなく、そこからそれぞれが何を生み出すか考えるきっかけとなっていた。4人グループでは、「アドバイスし合いましょう」と言われなくても、場の設定の良さから、自然に見合い、対話が生まれていた。

③追求する中で「思っていたものと違う」ことがあっても、表したいことがあり、学んだことがあり、自ら表現方法を生み出すことができる。学習カードの計画通りでなくても、自分の考えた方法を試したり、友がしていることを試したりして、自分が「思っていた」主題に近づけていこうとする姿があった。

④制作場面では、初めてローラーを使ったこともあり、技法についての質問が多かったが、その中でも思いに目を向ける問い返しがあると良かった。学習カード等にかかれた主題や思いを見ながら、自分や友の作品を鑑賞する習慣をつけていけるとよい。

3 下伊那大会テーマ「思いつながら 広がる わたしの造形ネットワーク」～自分らしさを楽しむ授業～に関わって

偶然に生まれた色や形であっても、それを選ぶ基準は「思い」に裏付けされている。そうしたものを「思い」を中心に選択し、再現し、改良しながら積み重ねていった作品は、「自分らしさ」そのものではないだろうか。題材が、試行錯誤しやすく、失敗してもやり直せる、生徒の実態に沿った内容になっていたことが、生き生きとした制作の様子につながっていたと感じた。

＜文責 豊丘中学校 深町 さや香＞

大会運営の反省

～参観者の感想や大会当日の参加者の様子から～

1 研究について

- ひびき合うという言葉がよく、図工の表現が広がる楽しさを表していると感じました。
- HP を活用したことはよかったと思います。担当の先生のご苦勞に感謝します。
- 「表したい思いを持ち、自分らしい表現方法で楽しむ」ことは、図画工作において高学年になると苦手な子が多くなる傾向を感じる。その点からこの研究テーマはとてもよいテーマだと思う。また、研究内容も子どもたちの実態を基にして題材を系統的に扱ったり、表現方法の様々な工夫をしたりしてよかったと思います。
- 「思い」を大切に研究により、子どもが描きたいことをしっかりと持って授業に臨んでいることが、子どもたちの姿からよく分かりました。描きたいことに「こだわり」という視点をもとに、どう描くかを考える子どもの発想の流れが明確になる研究だと思いました。
- 県の研究推進委員会が全く機能していない中、下伊那支部の先生方、授業校の先生方、児童生徒のみなさんのおかげで、今回の下伊那大会が無事に開催できました。「思い」のつながりに視点を置いた研究、そして、授業を見せていただき、これこそが「私っていいな!」につながるものだなあ…と感じました。松川北小3年生の、あの子たちの笑顔…それにつきますと思います。
- 「自分なりの意味や価値を探究し」というところで、本日の授業は、その子なりの追求が見られ、大変勉強になりました。
- よい。「思い」「自分らしさ」が大切にされる、それが学ぶ(表現する)楽しさや自己肯定感につながっていく…そういった視点を持ってくり返し先生方が子どもをみて、授業作りを行ってきたことが、今日のいきいき表現することにつながっていたんだと思います。
- 自分なりの意味や価値を探究する、様々な表現方法を楽しめることは、自己肯定感を高めることにもなり、とても大切なことをテーマにされていると思いました。
- ・コロナ禍で県の研究推進が止まっていたので、大変かとは思いますが、支部として事前研究の段階から研究テーマに沿った授業づくりや、それが文章として見える学習指導案のフォーマットなどを共通理解しながら指導案作成ができるとよかったです。

2 研究授業について

【松川中学校】

- 中学校については、教材研究がよくなされていて、指導案審議の際にも実際の生徒作品や授業者の先生が作成されたすばらしい「制作手順動画」をみながら協議できたことがとてもよかったです。事前授業のタブレット活用や今回の制作手順動画など、ICT 活用という面からも大変参考になりました。
- 彫刻刀で板を彫る、ローラーで着色するなど、主に小学校で使うことの多い用具を中学生が使うことの面白さや表現の幅を再確認することができました。抽象表現の主題の難しさと面白さも味わうことができ、大変勉強になりました。

【松川中央小学校】

- まず何より先生も子どもも一緒に「楽しみ」ながら、本時のめあてに向かって授業をしている姿が素晴らしかったです。「心を解放させて」表現することの大切さを感じました。
- Kさんの姿より:M さんとの意見交換の場面で「狩りをしている人が自分?」と質問され、それに対して「扉を開く手が自分の手だ」と答えて、より明確に自覚できたと思います。さらに試しがきをもとにして、画用紙を三角定規で正確に何度も測って切り取っていて、自分の気に入った構図にこだわって表現する楽しさを味わっていました。完成させて、子どもたちが相互鑑賞する時が楽しみですね。機会があれば、是非観せていただきたいです。
- 子どもたち同士のあたたかいかわりがとてもよかったです。友の描きたいことに寄り添う言葉によって、表現

の高まりを見ることができました。子どもが発想する・考える楽しさを味わう授業だったと思いました。

- 北田先生の子どもの考えを引きだすやりとりがテンポよく心地よかったです。子どもたちもアイデアがよくあり、通常「空想の世界」という題材では、とんでもない発想になってしまうが、よく考えられたねらいに合った発想だった。北田先生とのやりとりの中で、子どもたちがアイデアを膨らませたり、修正したりしている姿があり、適切な机間支援がされていてよかった。前時の鑑賞で使ったいろいろな示範によって自分のアイデアを形にすることに効果的につながっていたと感じた。

【松川北小学校】

- 線材（ひも、毛糸、テープ）で囲むことによって生まれる空間、ひっぱり合うことで生まれる動き、様々な色の組み合わせ、重なり…などなど、1時間の授業の中で子どもたちがふれたたくさんの価値。これらを認め、支え、確かな学びとして返してあげる、共有することこそが教師の支援だと思います。空間への広がりや授業者の先生は期待していたと思いますが、ひたすら三つ編みをしていた女の子たち、1本の三つ編みを大事そうに何度も担任の先生に見せに行っていた子、そんな子たちの活動もあの空間の一部であり、全体としての美しさにつながっていたのだと思います。まさに、思いがつながり広がったのがあの空間なのだと思います。どの子ども心の底からあの時間を楽しみ、そして満足感を持って終えられたことがすばらしいと思いました。
- 生き生きとした子どもたちの姿が素敵でした。ひもを重ねるとどんどん存在感がでてきていて、つくっている子どもたちも楽しそうでした。見る方向によって見え方が変わるのも面白かったです。
- 素材に主体的にはたらきかけ、豊かな対話が見られた活動だったと思います。意欲的にからだ全体を使って表現する姿、毛糸とじっくり関わってひたる姿、とても素敵でした。
- 子どもたちそれぞれが、本時にどんな表現活動をするのかを決めて取り組み始めていた。友だちの活動の様子を「すごい」「気になる」とほめたり認めたりすつぶやきがあった。自分なりの表現を楽しむためには、他者からそれを認められたり、賞賛されたりすることも大切であり、今日の授業にはそれがあった。教師が子どもたちのそのつぶやきをひろって全体の場でその子の表現のよさを具体的な言葉で表現する場面があったら、さらに自分なりの表現の良さを感じて深めていくことができたのではないかと思います。

コロナ禍において、下伊那の研究テーマにある「造形ネットワーク」をいかに扱うかがなかなか定まらなかった。その中でも各校で「人との」「題材との」「素材との」「既習事項との」「自分との」という様々なネットワークの中での追求がなされるように授業を考えていった。

「自分らしさを楽しむ」という観点では、研究授業だけでなく、飯田・下伊那での絵画展出展時に、「思い」を大切に作品作り、出展のお願いを行った。飯田・下伊那でのこれからの図工美術が「自分の思い」や「自分らしさを楽しむ」ことに一層重きをおくことができるよう引き続き研究を行っていきたい。

3 講演会について

- 林耕史先生のご講演、とても興味深かったです。「わからない」「できない」…状態こそ学びなのだと気付かされた思いです。そして「わからない」「できない」を、自信を持って言える子を育てていくことも大事なのだと思いました。
- 「わからない」を楽しめる思考回路。「わからないけどおもしろいね。すきだな。」という言葉がとても印象に残りました。ぼのぼのの4コマ漫画のワンシーンは相方のことを考える難しさがよく伝わってきました。
- コロナ禍、どうすればいいのか「わからない」ということを、正解ではないけれど一つの解を出すことに楽しさを感じている私がいいます。答えのない問いに「何となく」でしか対応できない今、「何となく」のもつ価値を再認識しています。林先生の作品を見ることができたのもうれしかったです。
- 図工・美術で「わかる」を教えるのではなく、「わかろうとする」「わからないことを楽しむ」、そんな人間としてありのままを認め、共感していくことを大切にしていきたいと思いました。「上手だね」という安易に言うのではなく、その子の活動を見つめ、わかろうとしながら、その子の活動を認める声かけをしていきたいと思いました。
- 最後のまとめの中の「上手にできないといけないのではなく、ぼくがやりたいことをやれるということが大切」と

いう言葉にはっとしました。これをもとに授業を考える、子どもに添うことを自分の中でも大事にしていきたいと思いました。

○美術教育の大切なことを改めて教えていただき、なぜ自分が美術教師になりたかったのかを思い出しました。

職場にもどり子どもとの図画工作の時間を練り直して楽しみたいと思いました。ありがとうございました。

・翻訳されない言葉 —評価— 子どものやっていることをそのまま伝える。

・作家でもある林先生らしい視点から、コロナ禍の図工美術教育の価値や可能性について考えることのできるよい内容でした。

下伊那出身で元長野県の小中学校教師、現在群馬大学共同教育学部教授、そして作家としても活躍をされている林耕史先生にご講演をいただいた。今年度は、図工美術教育がこれからの子どもたちに果たせる役割についての内容であった。

幸い直接、講演をいただけたが、コロナの感染状況次第ではリモートでの講演会も想定していた。

4 その他

○コロナ禍での公開授業、とてもありがたかったです。開催までのご苦勞、本当に感謝です。

○本日はありがとうございました。来年に向けて、図工の研究を子どもたちのために頑張っていこうと思いました。

○来年度お世話になるという立場で参加させていただきました。図工・美術教育の大切な部分に上記の1～3、そして研究会などからたくさん触れることができました。学びの多い1日となりました。ありがとうございました。

○コロナ禍の中、なんとか開催できてよかったです。

○コロナ禍における大会のご準備、本当にありがとうございました。重い腰をあげて参加した大会でしたが、参加してよかったです。感謝します。ありがとうございました。

・校舎内外の案内掲示など、事務局で事前に何パターンも印刷して用意していただきありがたかったです。感想記入用紙も前日にいただけるとミスがなかったと思います。

・今大会の成果や課題が、これからの児童生徒の作品に反映されていくことを願っています。

▲演題の垂れ幕印刷などは本当は一週間くらい前を期限にできるとよかったと思います。

▲研究会会場や講演会場の換気が不十分であったと思います。(研究会会場は窓を開けてありました。)

▲まとめ方や分担など、事前に示してもらえると、司会進行や記録がやりやすいと思います。

コロナ禍の大会開催ということで、原則として参観は、支部の美研会員、県役員、次年度開催地区の関係者及び授業校職員とした。また、当初予定していた保育園の公開は中止した。

それに伴って、展覧会入賞作品の展示、教材業者のブース設置、大会後の懇親会等も行わなかった。また、大会冊子も下伊那美研のホームページ上で印刷可能として公開し、当日は参加者のみに配布した。大会参加費は、無しとした。

【編集後記】

コロナ禍での第 74 回長野県美術教育研究大会下伊那大会となり、思い描いていた大会運営とは全く違う形での開催となりました。大会の開催すら危ぶまれる中、たくさんの先生方のご協力のおかげで、大会を終えることができました。参加いただいた先生方、ご後援いただいた各種団体、授業会場校の先生方にも厚く御礼申し上げます。

欲を言えば、授業作りにご苦勞頂いた先生方の姿、そして思いをしっかりと持って造形活動を行っている子どもたちの姿を、また、林耕史先生のすばらしいご講演を、いつものようなたくさんの先生方に見ていただきたかったです。

来年度の県大会がどのような形になるのか、今後検討されていくかと思いますが、長野県の図工美術教育が本研究会員の皆様によって益々発展していくことをご祈念申し上げます。

下伊那大会事務局長 服部淳之介(松川中央小学校)